

住友化学 i-農力だより

<http://www.i-nouryoku.com/index.html>

第 34 号 10 月 10 日
発行 住友化学・住化武田農薬
お客様相談室 0570-058-669
発行責任者 古津 昇

目次

農家さん訪問記	p.1
りんごの病害虫チョットいい話(8)	p.6
住化アグログループ紹介(株)日本グリーンアンドガーデン	p.7
農薬あれこれ?なぜなに?コーナー	p.8
今月のお奨め農薬	p.9
農薬登録情報	p.10
病害虫発生情報	p.10
今月のご相談から	p.11
最近の「お・・美味しい!」	p.12
コラム・そば談義	p.13
編集後記	p.13



「ケア(オウム科)とマウントクックリ
リー(キンポウゲ科)」技術顧問 富樫

農家さん訪問記

山梨の果樹農家をリポートする若い秋山さん!

新宿駅発の中央線特急「かいじ号」が大月駅を過ぎてしばらく行くと、突如、眼下に盆地が開けます。そう、ここは甲斐の国。眼下に広がるのは甲府盆地です。まだ残暑の日差しが強い頃、桃・ぶどうの果樹農家、秋山晴英さん(40歳)を訪ねて山梨市までやってきました。

ぶどうの栽培暦は祖父の代から80年!



山梨県といえば、言わずと知れた日本一の「果樹(特に桃・ぶどう)」の名産地。

甲府盆地は日照量が多いのと、富士山のおかげで台風の被害が少なく、大雨時にも河川の決壊などが少ないため、昔から桃、ぶどうの栽培が盛んに行われてきました。この季節はちょうどぶどうの収穫期を迎え、首都圏近郊などからのぶどう狩りの観光客で賑わいます。訪れた当日も、秋山さん宅(写真)敷地の入り口から玄関にいたる場所には、甲州ぶどうがまるで天蓋のように実っていました。

秋山さんは桃、ぶどうを中心に、キウイなど

約 2.2 ヘクタールを栽培しています。山梨で 2.2 ヘクタールという面積は大規模な方で、桃は 130 アール、ぶどうは 70 アール、キウイが 20 アール栽培しています。

桃の栽培が多いのは、棚作りの必要なぶどうに比べて作業の手間が比較的かからないからだそうです。とはいえ、ぶどうの栽培歴は長く、祖父の代から続けて 80 年近くも経つそうです。ところでぶどうは実に品種の多い作物で、日本では 30 種類以上栽培されています。秋山さんのところでは収穫作業の分散化のため、巨峰(種無し)、ピオーネ(種無し)、甲斐路、甲州ぶどうを中心に、多摩ゆたか、ロザリオ、瀬戸ジャイアンツ、サニールージュ、マスカットベリーA など様々なぶどうを育てています。9 月一杯まで収穫して箱詰めして出荷するそうで、この日も収穫されて箱詰めを待つぶどうがたくさん並んでいました。



品種：甲斐路



品種：黄桃

病害少なくスムーズに収穫！

収量は、巨峰だと 10 アール当り約 2 トンだそうです。ちなみにピオーネは今年はまだ品物自体が市場に少ないため価格が好調だそうです。また、今年晩腐病の発生も少なく、ぶどうの「出来」も上々で、醸造用の甲州ぶどうなどは、収穫時に病気になる粒を取り除く手間がほとんどなく、収穫がスムーズにでき、作業も早かったとのこと。

甲府盆地でも山ぎわで標高の高い地域では朝夕の温度差があるため袋をかけたままでも色づきが良く、糖度ののった美味しいものができる反面、猿などの獣の被害にあう場合があります。それに対して平野部では朝夕の温度差が小さく、夏の高温時は袋の中も温度があがり色づきや糖度が上がらないため、途中で袋を外すといった作業が必要になってきます。栽培する場所によって苦労もさまざまなようです。



キウイフルーツ

桃・ぶどう・キウイの栽培では、各作物の作業(受粉やジベレリン処理、摘花など)が集中する春先(5~6月)が一番忙しい時期だそうです。収穫は早生から晩生の品種を栽培することで、作業の分散化を図っているとのことでした(桃は、7~8月中旬まで、ぶどうは8月中旬~9月一杯まで、キウイは霜が下りる前までが収穫時期です)。

地元企業での現場監督の経験が役に立つ！

秋山さんはエコファーマー認定農家()で、減農薬の取り組みも行っていますが、農薬はある程度使わないと収量に影響が出てきてしまうので全くの無農薬というわけではあり

ません。作業の効率化を一番と考えているので、農薬も必要不可欠と考えています。作業は主に両親と奥さんの4人であたり、広い面積なので、忙しい時期には手伝いの人に来てもらっています。

実は秋山さん、大学を出てからすぐに実家で農業を始めたわけではないのです。大学卒業後、すぐにアメリカに渡りたかったそうですが両親に反対され、そのまま地元の企業に就職しました。そこで約7年間は大学で専攻していた造園関連の仕事をしていましたが、現場監督的な仕事が多かったため「人の使い方」を身をもって学べ、その時の経験が、現在でも役立っているとのこと。ただ、企業が雇った人を監督していた時と違い、今は



巨大な幹の甲斐路

自分が人を雇うわけで、労働対価の面や人材の確保など経営者の視点からいろいろと難しい面もあるようです。今の規模では、春先に作業が集中し、どうしても人を使わざるを得ない状態です。今後、栽培面積を減らして家族のみの方がよいのか、あるいは法人化して人を使った

方がいいのかを悩んでおられるそうです。

作物のありがたみを感じる感覚が大切！

秋山さんの悩みは販売面にも及びます。

山梨は桃・ぶどうなどの一大産地であるため、大型量販店と一部タイアップしています。農家にとってタイアップは品物を安定的に買ってもらえるなどのメリットがあります。一方、最近は大型量販店の提案が多く、たとえば、ぶどうの粒を何粒かカップに入れて売ると単価あたりの金額が良いからと、よく考えずにやってみたら、実際は入れ物のカップ代もカップに入れる作業も、普通に箱詰めで出荷するより手間と経費がかかってしまったということがあったそうです。

そんなことで、消費者ニーズを考えて、大型量販店側はいろいろと農家側に提案するのはいいのですが、結局農家側にとって負担が多くなるのが現状だそうです。その結果、自分たち農家側もよく見極めて提携するべきと考えるようになったそうです。また、売り方にしても大型量販店だと、ただ機械的に並べるだけなのでなかなか売れないのが現状で、客に直接声を掛けるような売り方がベストとのこと。昔はそういう売り方を八百屋がしていたのですが、効率という名のもとに流通が中抜きされています。「中の人」は中の人

の役割があったはずなのに、と現状を憂えている様子です。

また、売れ筋品種決定権にしても、消費者ニーズが絶対と思っている風潮がありますが、自然環境（日当たりやその年の気候など）は人間では変えられないものであり、そうして出来上がった作物は自然からいただいているもののはず。本来なら、「消費者が欲しいものを作る」ではなく「出来上がったものを消費者が求める」べきです。このあたりの意識改革がなければ、果物に限らず作物のありがたみを感じる感覚というのはますます無くなってしまいかも知れません・・・とのことで、そう語る秋山さんの目には、わが国の農業の将来を案じる気持ちが見てとれました。

柔軟な思考と余裕の体力で地域のリーダー役！

悩んでばかりもいられません。秋山さんとはとも元気潑刺で実際 40 歳には見えません。

大学時代から柔道で鍛えているため、体力には自信があるそうです。そんな秋山さんの夢は、自由な発想のできる若い人を増やして、地域を活性化し、みんなで伸びて行くことだそうです。

「最近気になることは、手伝いに来てくれる若者の中に、規制に縛られている人が多いということです。こうしてはダメという規制に縛られたまま慣習化すると、そこから何も生まれなくなってしまう。若い人は元来、もっと自由な発想ができるはずなのにと感じます。ただ、こういう柔軟な考えは余裕や体力があってこそです。自分は柔道をやっていたせいもあって体力がある方だと思っています。体力があれば、考えにも余裕が出てくるものです」そう語る秋山さんは、自由な発想ができる若者が多くなることを願って週 2 回、地域で 20 人ほど相手に柔道を教えているそうです。

また、地区ごとに果実部会がありますが、一番の若手が秋山さんで、ほとんどが 50 歳以上だそうです。秋山さんいわく「地域でのしくみやムードがよくならなければ若い農家も増えないだろう」さらに「若い同士でまとまっていくのが地域で一番力になるはず。それらの人が苦勞をしながらがんばってよい見本になれば『じゃあ僕らも』ということで、いろんな世代がついてきてくれるようになると思うし、そうなれば一番いい」とのことです。実際、秋山さんは山梨県で 2 番目にエコファーマーになったのですが、その後それにならって地域の人々が皆でエコファーマーになりました。地域全体でエコファーマーになったのは全国で初のことだそうですから、若い人が地域の人を引っ張った良い一例と言えるでしょう。

既存の出荷システムを利用するなど自由な発想を！

次に、地域での出荷形態ですが、実にさまざまです。JA を通して出荷している人や、産地直送をやっている人、JA 出荷と半々の人、インターネット販売の人といろいろな人



軽トラの荷台を工夫し巨峰運搬



ぶどうの箱詰作業

がいるなか、秋山さんは、産地直送もやっていますが、JAにも地域では一番多く出荷しています。一つの出荷先に集中してしまうと作物が停滞してさばけないのが現実だそうで、自由な発想でいろいろなやり方で出荷するのは悪くはないと、秋山さんは考えています。「産地であるからにはある程度地域でまとまらないとバラバラになってしまいます。選果機の設備だってある程度は必要だから、まとまらないと購入できない」とお考えのようです。その根底には、農業は一人では出来ないし産地として地域で伸びて行きたいという希望があるからにほかなりません。「そうなるには、今あるシステムを大きく変えるというよりは、今までのシステムを尊重しつつ、柔軟な発想で臨機応変にやって行けばいいのかなと思っています」こう話す秋山さんには、産地を背負って立つ気概と柔軟な考え方が確かに共存していて、非常に前向きな力強さを感じました。

凄い父の背中をこれからも追っかけたい！



高台から見る甲府盆地

最後に、秋山さんが子供の頃の話をしてくれました。

「実は保育園の頃から農業をやりたいと思っていました。父が立派でその存在が大きかったからだと思いますが、広い畑を管理しつつ柔道も教えていた父はやはり今考えてもすごい人だと思います。こういう父の姿を見て育

ったところが大きいのです。それだけに『父を追いかけてみよう』と思ったのかもしれない。

それに、実際に農業は楽しいものです。自分の性分もあるのですが、自分で自分をコントロールしながらできる農業はやはりやりがいがあります。自分の息子も自分を見て（少しずつ洗脳して(笑)）育ててもらえれば嬉しいですね」秋山さんには、お子さんが3人います。一番上が小学生の長男です。この息子さんが実は果物を一切食べないのだそうです（食べるのはバナナくらい）。とはいえ、幼稚園の頃から自転車で遠出するようなやんちゃっぷりで、今も小学校の先生いわく、いまだき珍しい立派な？「ガキ大将気質」だそうですから、なんとも頼もしい限り。将来が今から楽しみなのはお父さんだけではないはず・・・。そんなことを思いながら、西日に傾いた甲府盆地を後にしました。（佐伯・古津）

今回のインタビューは、(株)アセラ様のご協力があった実現しました。ご協力ありがとうございました。

()エコファーマーとは？

『土づくり・減化学肥料・減化学農薬』の3つの技術に一体的に取り組む農業者のこと

[目次へ戻る](#)

りんごの病害虫チョットいい話 (8)



日本の工業発展を支えた鉱山開発の負の遺産による「炭疽病」の発生！

筆者が住んでいる秋田県北部は6月初旬頃になると周囲の山々が白一色になり、どこからともなく甘い香りが漂ってきます。

その正体はアカシアの木〔和名：はりえんじゅ（ニセアカシア）〕、このままでは特に話題にすることではないのですが、問題はアカシアがリンゴ「炭疽病」の発生に深く関わっていることなのです。当地方には、かつてわが国の鉱物とりわけ銅産出の多くを占めていた阿仁、釈迦内、小坂、尾去沢などの大きな鉱山が点在し、我国の産業発展に寄与してきました。

しかし、足尾銅山の例のように精錬の過程で排出される亜硫酸ガスなどの鉱毒により、



炭疽(たんそ)病によって腐敗した果実 (1967. 1)

近くの野山の木々が枯れ込む公害が発生しました。この対策として公害に強い樹種としてアカシアが選ばれ、公害対策事業として大規模な栽植が長年に亘って行われた結果、鉱山が閉山した後も旺盛な繁殖力により周囲の山々は勿論、人家の近くでも多く見られるようになってしまいました。

炭疽病は欧米では既に知られていた病害ですが、我国では明

治42年に当地方のりんごに発生したのが実際に被害が記録された最初でした。当初は感染源が結果痕や新梢の枯れ込みと思われていたのですが、秋田県果樹試験場の工藤哲男（昭和45年）は鹿角市のりんご園で時々炭疽病が多発することから園周辺の植生との関係を調査しました。その結果、アカシア林に近いほど病果率が高いことを観察し、アカシアの葉柄から *Colletotrichum* 属菌を分離し、りんごに病原性があることを確認し本病の発生にアカシアから飛散した炭疽病菌が関わっていることを報告しました。その後、長野県等からシナノグルミやイタチハギなども感染源になることが報告されるようになりました。本病の発生が多いときは、防除対応のみならず樹園地周囲の植生にも留意することが必要です。

鹿角市における筆者の調査では、アカシアからの分生孢子飛散消長は梅雨の前半に当たる6月中旬から7月上旬にかけて飛散のピークが見られ、次いで8月下旬から9月上旬頃にもう一つの小さな山が見られる年が多いようです。

最近の研究では不完全時代である *C. gloeosporioides* の他に、ブドウ晩腐病菌などの病原菌でもある *C. acutatum* も病原性を示すことが分かるなど、りんごの炭疽病は古くて新しい病害として今後も注目されていくことと思われます。（技術顧問 水野）

次回は「モニリア病」に触れたいと思います。

病害写真提供：弘前大学農学生命科学部・植物病理教室より

[目次へ戻る](#)

住化アグログループ紹介

(株)日本グリーンアンドガーデン

ゴルフ場・芝専用配合肥料

タフベルディ



タフベルディはゴルフ場のキーパーさんにも納得してもらえらる優れた施肥効果と省力効果を併せ持ったフェアウェイ・ラフ・ティーグラウンド用の芝専用配合肥料です。即効的に肥料効果を発揮する化成肥料と溶出タイプが異なるコート肥料を組み合わせることで、年間1回～2回の施用で1年間安定した肥料効果を維持でき、追肥の必要性が無いことから、芝の肥料管理が省力的になる新しい肥料です。

[特徴]

- 毎日、毎日少しずつ適量の肥料成分が溶出するので、やり過ぎや不足がなく、植物がより健康体になる。このため、ダラスポットなどの病害になり難い芝になる。
- 肥料の余剰施用、溶脱がなく、土、河川、海を汚染しない。
- 短期から長期まで、じっくり効くので、芝の生育が安定する！
- 土壤中窒素含量を安定的に高く維持する作用があるので、土壤微生物の活動が活発になり、サッチ層（芝の切りカス）の分解を促進する。

[タフベルディの商品銘柄と標準施肥量]

商品銘柄	含有保証成分(%)				配合内容 ※1	主な使用対象 ※2	㎡当り標準施肥量
	N	P	K	Mg			
タフベルディ・NS	23	4	4	1.5	化成 + 100日タイプ + 140日タイプ	北海道・東北の春まき元肥用	20~40g
タフベルディ・WS	22	4	5	1.5	化成 + 140日タイプ + 220日タイプ	関東以西の春まき元肥用	
タフベルディ・NA	20	5	4	1.5	化成 + 100日タイプ + 140日タイプ	東北の秋まき元肥用	
タフベルディ・WA	19	5	4	1.5	化成 + 100日タイプ + 220日タイプ	関東以西の秋まき元肥用	
タフベルディ・TP	20	5	4	1.5	化成 + 50日タイプ	追肥や補足する肥培管理用	10~30g

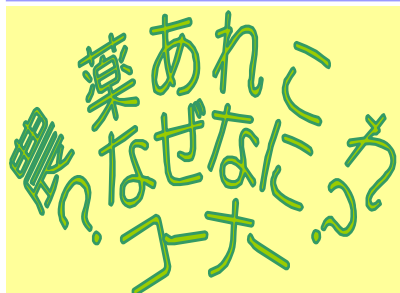
※1: OO日タイプとは、25℃水中で80%が溶出する日数のことです。
 ※2: 主な使用対象であって、使用地域を限定するものではありません。

[使用例]

使用例		こよみ								
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
		桜開花	立夏 晩霜	夏至 →梅雨期→	→最高温乾燥期→	立秋	秋分 →台風期→		立冬 初霜	冬至 結氷
春まき	①NSかWSを春に元肥施用、※②秋に葉色不足の時TP施用	NS・WS ↔ ①20~40g/㎡						TP ↔ ※②15~20g/㎡		
秋まき	①NAかWAを秋に元肥施用、※②梅雨後半に葉色不足の時TP施用			TP ↔ ※②10~15g/㎡			NA・WA ↔ ①20~40g/㎡			
春・梅雨 後期まき	①TPを春に補足施用、②梅雨後半にNSかWSを元肥施用	TP ↔ ①20~25g/㎡		NS・WS ↔ ②20~30g/㎡						

※夏季に無肥料でも葉色が落ちない地域では、TPを①春(4月頃)と②秋(9月頃)に20~30g/㎡施用する使用方法もあります。

[目次へ戻る](#)



同じ名前の商品でも容量が違つと中味は？

ご質問

家庭菜園でいろんな野菜を育てています。

病気にかかるのを予防するために、何か良い薬剤はないかと探していたところ、お店で殺菌剤「ダコニール1000」を勧められました。陳列棚をよく見ると30mL入りと250mL、500mL入りのものがあるようです。これは容量が違うだけで、中味は同じモノなのでしょうか？金額も、容量がずいぶん違うのに、あんまり変わらないみたいで不思議です。250mLのものを買ったほうがお得な感じですがどうでしょうか？



イラスト 加藤

お答え

商品の名前が同じならば中味は同じです。でも、大きなボトルと小さなボトルの内容容量が大きく違うのに、価格の差がそれほど大きくないと、不思議に思いますよね。中身が違うのでは、とってしまうのも無理はありません。

商品の価格には、薬剤自体の価格以外に、製品として出荷するまでの様々な経費が反映されます。経費には内容量に影響されない部分も多いため、一般に小さいほうが割高になります。また、お店としては一度にたくさん売れたほうが都合が良いので、容量が大きいほうが安くなる傾向があります。これは農薬に限ったことではなく、例えばお砂糖でも、徳用の大袋とコーヒー用に小分けしたものでは、1グラム当たりの値段を比べると、小分けしたもののほうがずっと割高ですよ。簡単に言えば、それと同じ理屈です。

では、割安な250mLを買ったほうが得でしょうか。家庭菜園での使用では、1000倍希釈で使用する場面が多いと思われませんが、この場合、ボトル1本で250Lもの散布液ができ、通常の使用量で10アール以上に散布可能です。そのため、年に数回使用しても、小規模の家庭菜園で使い切るのは難しく、余らせたまま使用期限が切れてしまうと、薬剤の処分に困ることになります。結論として、ご自身の使用量をあらかじめ計算し、それにあったサイズの製品を購入することが賢い方法と言えます。

(佐伯、南)

[目次へ戻る](#)

いちごの病害防除に「ベンレート水和剤」

萎黄病・炭疽病の防除について！

いちご栽培は今が仮植及び仮植栽培期間ですので、萎黄病や炭疽病を対象とした灌注処理や苗根部浸漬の薬剤「ベンレート水和剤」を紹介いたします。

「ベンレート水和剤」の有効成分のペノミルはベンズイミダゾール系の浸透移行性作用を持つ殺菌剤です。低濃度で広範囲の病害に強力な殺菌効果を示し、予防と治療に優れた効果があります。人畜毒性・魚毒性が低い安全性の高い薬剤です。作物に対する薬害の心配もほとんど無く、低濃度で使用しますので収穫物に対する汚れも少なく、品質を高めます。

「ベンレート水和剤」は、野菜類の炭疽病・葉かび病や、ハウス栽培の重要な病害の菌核病・灰色かび病や果樹のそうか病・黒星病・輪紋病等に優れた効果があり、土壌病害では萎黄病・つる枯病・萎凋病・乾腐病・白紋羽病等に優れた効果を発揮します。特に防除の困難なフザリウム菌による病害に、立毛中に処理できる剤として期待できます。病原菌の感染前に本剤を散布すると、病原菌胞子の発芽管伸長を阻止し、作物組織内への侵入を防ぐ予防効果を示します。組織に侵入した病原菌の菌糸に対しても、散布したベンレートが浸透移行して菌糸の伸長を阻止するので病害に対して治療効果を発揮します。

いちごに対するベンレート水和剤の上手な使い方を説明します。いちごの萎黄病の病原菌はフザリウム菌で、カビの一種です。この菌は、いちごだけを犯します。前年発病してできた厚膜胞子が土壌中に残っていて、ランナーやいちご苗の根から侵入します。対策は土壌消毒と抵抗性品種の栽培と薬剤処理です。「ベンレート水和剤」による処理はいずれも500倍液で、仮植前の1～3時間苗根部浸漬か仮植時及び仮植栽培期間の1㎡当り3Lの灌注です。土壌感染のため早期防除が必須です。ポット栽培でも灌注は面積換算で使用できます。いちごの炭疽病は前年の羅病残渣によって越冬した第1感染源の病斑上に形成された胞子が雨や灌水の水滴で飛散し、新たな発病を引き起こします。対策は無病の親株の選抜、土壌消毒・排水対策・はねない灌水対策と薬剤による防除です。「ベンレート水和剤」での処理は萎黄病と同様500倍液で仮植前の10～30分間の苗根部浸漬と仮植時又は本圃定植後の1㎡当り3Lの灌注です。本剤は3回まで使用できますが、本圃定植後は1回のみで、使用時期は収穫90日前までです。(収穫90日前までの制限変更は現在検討中です)(富樫)



[目次へ戻る](#)

農薬登録情報

< 9月19日と10月4日にあった主な適用拡大の内容です >

今月は以下3剤の適用拡大ご案内です

適用拡大

種類	薬剤名	変更点	作物	病害虫名/ 使用目的	使用量ほか
殺虫剤	アディオ ン乳剤	害虫追加 (無人ヘリコプターによる散布)	だいず	マメシクイガ	24倍 800mL/10a 収穫7日前まで3回以内 無人ヘリコプターによる散布
		作物名変更	花き類・ 観葉植物 (はぼたん を除く)	「花き類・観葉植物」 「花き類・観葉植物(はぼたんを除く)」に変更	
		使用回数 の変更	はぼたん	ペルメトリンを含む農薬の使用回数： 「6回以内」に変更	
	ダントツ粉剤DL	害虫追加	だいず	フタスジヒメハムシ	4kg/10a 収穫7日前まで 3回以内 散布
殺菌剤	スミレックス 水和剤	作物追加	にんじん	菌核病	1500倍 収穫30日前まで 1回 散布

(佐伯・南)

[目次へ戻る](#)

病害虫発生情報

10月初め～10月中旬に各県から出された病害虫注意報・特殊報から、主要なものをお知らせします。

注意報(10月3日)高知県/タバココナジラミ/ナス、ピーマン、シシトウ、トマト(施設栽培)

〔当社登録剤〕: なす/スミロディー乳剤、ダントツ水溶剤、ダントツ粒剤、ベストガード水溶剤、粘着くん液剤。

ピーマン/ダントツ水溶剤。

シシトウ/粘着くん液剤。

トマト/スミロディー乳剤、ダントツ水溶剤、ダントツ粒剤、ベストガード水溶剤、粘着くん液剤。

注意報(10月4日)愛知県/イチゴ/ハダニ類

〔当社登録剤〕: オサダン水和剤25、オサダンフロアブル、スカイマイトくん煙剤、粘着くん液剤、ロディーくん煙顆粒、ロディー乳剤。



ハスモンヨトウの幼虫

注意報（10月4日）愛知県/野菜類、花き類/ハスモンヨトウ

〔当社登録剤〕：ゼンターリ顆粒水和剤、プレオフロアブル、フローバックDF。

特殊報（10月4日）/埼玉県/キク科作物/アワダチソウゲンバイ

〔当社登録剤〕：登録剤なし

注意報（10月5日）徳島県/野菜全般/ハスモンヨトウ

〔当社登録剤〕：ゼンターリ顆粒水和剤、プレオフロアブル、フローバックDF。

（鈴木）

[目次へ戻る](#)

今月のご相談から

ニラの葉腐病に「バリダシン液剤5」

Q：ニラの葉腐病防除の「バリダシン液剤5」の使用時期で刈揃え前までとはどんな意味のことですか？

A：普通使用できる時期は収穫前までの日数で表示しますが、ニラでは刈揃え前までの表示になります。ニラの栽培では年間で5～6回収穫しますが、回数が多くなると株が疲れ、品質の低下が起こるので途中で収穫を休んで株養成をします。

株養成後、刈揃えをします。葉腐病はリゾクトニア菌で、土壤中に生息している菌が雨によるドロはねで葉に付着してそこから感染します。地際部の外葉基部に水浸状の病斑を生じ、拡大すると芯葉近くの葉まで枯らします。発病すると株の生育が劣り、収量や品質が低下します。発病時期は高温時の8月上旬～9月下旬の株養成期で、強い雨や台風の後には発生しやすい病害です。

防除は「バリダシン液剤5」が有効です。本剤は抗生物質のため、収穫物に残留しないことと、株養成期が感染期であることから収穫終了後～株養成期間に散布し、刈揃えまで防除できます。それが刈り揃え前までの意味です。生育期間中でも散布できますが、散布したニラはすて刈をして収穫は出来ません。

「バリダシン液剤5」は、ユニークな作用で菌系の生育を停滞させ、病原性も喪失させる効力が長期間持続します。さらに、菌系に速やかに吸収されるので耐雨性があります。吸収された薬剤により菌系内を薬効が伝わる波及効果がありますので安定した作用を示します。散布時期については、収穫終了後できるだけ早めに実施することと、降雨後直ちに散布することをお奨めします。

（富樫）



[目次へ戻る](#)

最近の「お・・美味しい!!」



心にも効くビタミンカラー

弊社相談室から佐伯がお送りします
最近の「お・・美味しい!!」
女性の目・主婦の目・はたまた酒呑み??の目(笑)で、
毎月「これぞ!!」というものをご紹介します。
どうぞお楽しみに♪♪♪

最近、なんだかものすごく忙しいのです(仕事が)。農繁期は過ぎたというのに目の回る忙しさ・・一体誰のせいでしょうね。

あ、こんにちは。毎日残業のお疲れモードで始まりました今月の「お・・美味しい」



見た目は地味でも効果抜群!

です。とっても地味な感じの食べ物ですが、見たまんま「かぼちゃの煮物」です(笑)。

うちは共働きの2人住まいです。主に食事は私が作っていますが、こここのところの忙しさで、食事がおざなりになりがちです。最近では便利ですから、外食したり買ってきたりと、その場しのぎの選択肢も多いのですが、そればかりではやっぱり飽きてしまいます。そんなときに、ビタミンカラーがきれいな野菜をじっくり煮て食べると、美味しく

て体に良いばかりでなく、なんだか心が「ホッ」とするものです(もちろんかぼちゃは国産、北海道産)。

それにしても、なんてことない「かぼちゃの煮物」に癒されてしまう自分って一体どうなのでしょうね(笑)。おそらく食べるのがたとえ夜遅くて22時を回ってしまっても、「自分で作ったものを食べる」という行為が、私にとって一種の精神安定剤みたいな役割を果たしているのでしょう(基本的に料理好き)。実はこの記事も残業で書いています(笑)ええい!今日こそマトモなものを作るぞ!!それにはまずスーパーが開いている時間に帰らねば・・(汗)。

それでは皆さんまた来月お会いしましょう。お会いできれば!?

(佐伯)

[目次へ戻る](#)

コラム・そば談義

本誌先月号の「農家さん訪問記」で、茶(品種名：べにふうき)の栽培に取り組んでいる徳之島の豊村さんを紹介した。

後日、ご覧になった会員の方から大きな反響があった。「べにふうき緑茶」は機能食品なので直接効能は謳えないのだが、メチル化カテキンを多く含むことで花粉症やアトピー症状が軽減されるというものである。

さて、その続編ではないが、同じ徳之島で「ごま茶」なるものを加工・販売している瀬崎さんにもお会いした。豊村さんと同様、この方も土建会社の社長さんである。ごまの栽培を農家の奥さんをお願いし、毎日若い葉を収穫し加工・販売されている。ごまの葉はビタミン B6 が多く含まれていることから、顔のシミが薄くなったり白髪が減ったり爪がピンク色になるなど、中高年にとって嬉しい効能(特許出願中)があるとのこと。早速、私も購入し毎日お茶にして飲んでいるが、何となくいい感じである。しかし、社長さん曰く、女性の方が効果は顕著に現われるそうだ。(島のお母ちゃんの評価!?)

それは兎も角として、日本の農政が変わったことで*異業種の進出が目覚ましい。特に土木建設業界が目立つようになったと思う。その理由として道路整備などの地方財源が圧縮され、入札制度が定着し、注文が思うようにとれないことで経営が厳しいようである。特に地方の小さい土建会社は、その影響をもろに受けることから、生き残りをかけ必死で新しい事業を模索している。その証拠に、島で最初に「べにふうき緑茶」の栽培に取り組んだ豊村さん、「ごま茶」を手掛けた瀬崎さんがそうである。また、この業種は農業に参入するのに都合がいい面がある。例えば、従業員の多くは農家の方が多く、会社の手持ちの土木機械を使って畑やハウスなど栽培や基盤整備はお手の物である。また、利益管理も会社経営の中でしっかり身に付けている。生産物も直接売るのではなく、一度加工したりして最終製品で付加価値を付けて販売するなど商売が上手である。このような企業人が増えてくると、これからの日本の農業は生き活きとして面白くなるような気がするのだが・・・

ところで、今回はそばの話が書けなかったが、これからが「新そば」の美味しい季節である。近々、江戸ソバリ工仲間と信州の戸隠まで遠出する予定である。そこで、そば屋の梯子ではないが思う存分そばを食べ、秋を満喫しようと楽しみにしている。(古津)

*農業分野への異業種参入について、政府が98年末、企業の農業生産法人への出資や農地取得などを解禁する方針を示したこともあり、追い風になっている。

編集後記

10月に入って、猫も朝方になると布団で寝るようになりました。ところで、近頃気になるのは食料品の値上がりです。自動車の燃料としてバイオエタノールの需要が増えていることで、アメリカの農家は小麦からとうもろこしに栽培をシフトしています。

それにより、今朝のニュースで山崎製パンが1割前後の値上げに踏み切るとの発表です。経済大国日本では、これぐらいの価格アップで騒ぐ人はいないと思いますが、日本でも今や主食になりつつあるパンです。そのパンが値上がりするのは、何となく不気味な気がします私の取り越し苦労でしょうか？



イラスト 加藤

[目次へ戻る](#)